

博士学位論文審査要旨

2012年1月16日

論文題目： 近世前期における茶の湯の研究—表千家を中心として—

学位申請者： 千 芳紀 (宗員)

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 村田 誠一

副査： 文学研究科 教授 太田 孝彦

副査： 文学研究科 教授 岸 文和

要 旨：

一般に茶の湯は16世紀末、千利休によって大成されたと言われている。しかし茶の湯の研究においては茶の湯はその後どのように継承・展開されたかは、かならずしも十分明らかにされているわけではない。本論文は、茶の湯が近世前期において、利休以後どのように創造的に継承され、どのような茶の湯の理念が形成されたかを、新出史料をも含めて実証的に明らかにし、茶の湯の歴史の空白を埋めようとするものである。本論文の著者は近世前期、すなわち17世紀及び18世紀前半を、1690年頃を境にして近世前期前半と後半とに二分し、第1章では茶の湯の歴史的背景について、茶家としての千家の成立と千家流の茶会の様式の形成について述べ、第2章では主に茶会と道具を分析して茶の湯が大きく変化したことを実証的に論証し、第3章では茶の湯の理念として特にさびについて独自の考察を行った。

本論文の学術的な価値は、主として3代元伯宗旦、4代江岑宗左の茶会記、道具帳や茶書、書状などに基いて、宗旦、江岑の茶の湯の理念が6代覺々斎、7代如心斎へ継承されるとともに、銘により茶会の趣向が表現されるようになり、茶会の機能が変化したことを、実証的に明らかにした点にある。すなわち茶会やそこで使用される道具に俳語を多く用いた銘がつけられるようになり、茶会は季節感、慶弔などの趣向を主客が共有する有意味的な世界の形成へと、茶会の機能が大きく変化したことを論証した。学術的価値として特筆すべきことは、茶の湯を貫く理念の形成と継承を論じた第3章において、宗旦の茶の湯の理念が、これまで一般に言われてきたような、豪華と粗相とを対立させ、粗相のなかにも美を見出すというわびではなく、一畳半という極小の空間で掛け物も花入も必要としない、最少限度の道具で構成された簡素な茶会にその理念の表れを見ることができるよう、粗相に徹した自然体の茶のあり方としてのさびであるという主張である。

利休以後の茶の湯の展開についての記述の空白は、上記のような茶会記や道具帳などの豊富な史料とそれへの分析により埋められ、今後の茶の湯の研究の基礎になると評価される。

よって本論文は、博士(芸術学)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

学力確認結果の要旨

2012年1月16日

論文題目： 近世前期における茶の湯の研究—表千家を中心として—

学位申請者： 千 芳紀 (宗員)

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 村田 誠一

副 査： 文学研究科 教授 太田 孝彦

副 査： 文学研究科 教授 岸 文和

要 旨：

上記審査委員3名は、2012年1月16日午前10時より2時間にわたって、学位申請者に対して口頭試問を行った。申請者は提出論文への質疑に対して、詳細で的確な応答を行うことによって、本論文の学術的価値を実証するとともに、美学、芸術学、文化史等の関連諸領域への広く深い学識を有することを示した。また外国語（英語、中国語）についても、すぐれた能力を有していることを示した。以上のことから、本申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認められる。

博士學位論文要旨

論文題目： 近世前期における茶の湯の研究—表千家を中心として—
氏名： 千 芳紀 (宗員)

要 旨：

茶の湯が16世紀末に千利休によって大成されたとするのは、今日では茶道史の通念となっている。しかし利休によって大成された茶の湯が、必ずしも今日そのまま実践されているわけではない。利休が築き上げた茶の湯の様式や理念を、その後継者である千家の歴代家元が、それぞれの時代の要請に応じた茶のあり方を模索し、新たに創意を加えることで今日の茶の湯が存在するといえよう。したがって、茶の湯研究においては、利休の道統を守りつつ、後継者たちがいかにして茶の湯を創造発展させてきたのかを問うことが求められる。特に近世前期（本論文では17世紀初頭から18世紀中期までの約150年間を称する）は、茶家としての千家が確立してより家元制度成立へと至る、現代の茶の湯の社会的基盤がほぼ固まり、新しい茶の湯像が形成された時代である。そのように茶の湯が大きく変化した時代であったにもかかわらず、これまでにこの時代の千家に関する研究は十分になされてこなかった。その一つの理由として、千家内部史料の不備という状況があげられる。しかし、近年表千家に伝わる茶会記や茶書など、歴代の茶の湯像や理念がうかがえる史料の存在が明らかとなり、それによって従来の茶の湯の歴史の空白期を埋めることが期待される。本論文ではこれらの新出史料を用い、利休が大成したとされる茶の湯を、それぞれの時代に各歴代が継承する過程において、どのような「理念」をいただき、どのような茶の湯を実践したのかを明らかにしたい。

本論文は、序章、第一章から第三章、結論より成る。各章は二節に分かれ、それぞれ近世前期を二分する時期区分に対応する。すなわち、本論文が対象とする1600年頃より1750年頃までの近世前期の約150年間を、1690年頃を境として二分し、第一節で17世紀を中心とした前半期を、第二節で18世紀を中心とした後半期を扱う。つまり、第一章第一節が分析する時期は、テーマを変えながら第二章第一節、第三章第一節において分析する時期に一致するという構成である。各章の内容を以下に述べよう。

序章では、本論文の課題とこの分野の先行研究、ここで用いる家元史料の概要を述べた。

第一章では、近世前期における千家が置かれた歴史的、社会的背景と、それに対応する茶の湯の変化を考察した。第一節で取り上げる17世紀は、江戸幕府による幕藩体制が確立し、社会が安定へと向かった時代である。こうした時代に、四代江岑宗左による紀州徳川家への仕官をはじめとして、宗旦の三人の息子たちがそれぞれ茶を以て大名家に仕官することで三千家が成立し、千家の経済的基盤が安定し、茶の湯を職業とする茶家としての千家が確立した。すなわち、桃山時代の個人の才覚が重視された茶の湯から、利休の血脈を引く「家」の茶の湯という位置づけに変わっていった。その中で千家は利休以来の伝承を積極的に茶書として記録し、膨大な情報を蓄えることで、茶家としての充実をはかった。

第二節は、都市文化発展の中で、茶の湯が一般町人の趣味、教養にも取り入れられ、その支持層が拡大した時代である。こうした状況に対応するため、覚々斎、如心斎によって新たな道具が生み出され、七事式という集団で行われる新たな稽古法が創作された。また家元のもとに茶の湯教授を職業とする師匠層が誕生し、やがて家元を頂点とするピラミッド型の茶の湯相伝システムが完成し、家元制度成立へとつながっていった。この時代は様々な芸能において家元制度が誕生した時代であるが、茶の湯においては従来、如心斎の時代に成立したとされてきた。しかし、一代前の覚々斎の茶会記や道具帳を検証することで、まず茶の湯人口の増大を数的に裏付けること

ができ、また伝授制度はすでに覚々斎段階でできあがっていたことが確認できるので、覚々斎の時代には家元制度の基盤となるものが確立していたことが明らかになった。

第二章では、近世前期の千家の茶の湯像について考察した。茶の湯像とは、道具組に表わされる茶会の様式や趣向、および道具の特性などによって形成されるもので、ここではその変遷を茶会記や道具帳を用いて明らかにすることが目的である。第一節では、江岑宗左の茶会記を用い、宗旦や一翁宗守、中村八兵衛といった千家一族の茶会と、それ以外の茶会、すなわち宗旦、江岑の交流圏における茶会の使用道具の傾向を分析、比較することによって、千家での茶会の様式がその周辺の茶会においても踏襲され、「千家流茶会様式」というべきものが形成されたことを述べた。こうした様式を、同時代の大名茶の流れを引く茶会記と比較し、千家流の特性をより明確に示した。すなわち、大名茶では「真」の格を持つ名物道具が重用されていたのに対し、千家流の茶会では「当代」の禅僧の墨跡、竹花入や棗など道具の格にこだわらない傾向が見られた。また、千家歴代による書や竹花入、茶杓などが多用された。第一章で述べたように、茶家としての「千家」の確立とともに「流儀」の意識が芽生え、そうした意識が千家歴代による道具の使用に表れている状況を述べた。

第二節ではこうした「千家流茶会様式」が、覚々斎、如心斎の時代にも継承されていることを、同じく茶会記の分析から明らかにした。しかしその一方で、覚々斎の道具帳に見られる多種多様な俗語の「銘」を分析し、それらが当時流行していた俳諧に用いられた俳語に由来するものであることを明らかにした。こうした俳語の銘によって、覚々斎は茶の湯に俳諧の要素を取り入れようとした。それは、銘による言葉の付け合いによって茶会の趣向を表現するというもので、覚々斎によって生み出された新たな茶の湯像であった。さらに「銘」を通して俳諧という文学的要素が導入されることで、茶会は季節感や慶弔、諧謔といった趣向を主客が共有する場となり、茶会の機能がこの時代に変化したことを明らかにした。

第三章では、千家歴代が流祖利休の理念をどのように解釈し、自身の理念として展開したのか、すなわち茶の湯を貫く理念の形成と継承を、歴代自筆の書状や茶書を用いて考察した。第一節では、宗旦の書状および江岑の茶書に見られる二人の理念を検証した。まず宗旦が「わび」ではなく「さび」を自身の理念の根本においたことを述べた。宗旦自身が作った茶室や腰掛を「粗相」という言葉で表現したように、その「さび」は飾らない素地のままの状態、古びて枯淡な趣を醸し出すものであった。あるいは「物すくな」という言葉にあるような、床なしというような飾りの空間すら排除した、一畳半という極小の空間で、掛け物も花入も必要としない最小限度の道具で構成された簡素な茶会にその理念の表れを見ることができた。利休時代の「わび」が「豪華」と「粗相」とを対立させることによって、相対的に粗相なものの中にも美を見出すというものであったのに対し、宗旦の「さび」は粗相に徹し、対立物を持たない粗相なるものの中に美を見出すとしたものであった。江岑は、宗旦の「さび」の理念を継承しつつも、茶の湯に向かう姿勢について言及し、所作や茶会の趣向などにおいて自然体の茶のあり方を「ろく」という言葉で表現した。そうした境地を得るための手段として、江岑は「修練」を重んじ、修練によって「さび」の境地、言い換えれば自然体に徹した境地を手に入れることを目指した。

第二節では、如心斎の理念について、彼の言動を忠実に伝えるといわれる『不白筆記』を用いて検証した。その中には、「常」への傾倒と「稽古」の重視という二つの観点がみられた。「常」への傾倒は、名物道具にこだわらない宗旦の姿勢や、自然体のあり方を求めた江岑の理念を継承し、禅の思想を加えてその理念をさらに徹底したものである。また「稽古」の重視によって「型」を身に付け、「型」を身に付けることでふさわしい精神を獲得するというスタイルを提唱した。こうした如心斎の理念の背景には「禅」の思想がある。その思想は、如心斎が新たに制定した稽古法である「七事式」にもみられる。七事式は茶の湯人口の増加に伴い、多人数が一度に参加できる新たな稽古法であるが、一方で稽古の形骸化を防ぐために、一つ一つの式に禅の境地を取り入れることで理論的な裏付けをしたものであった。すなわち、大衆化する茶の湯に対応した新たな

な方式でありながらも、草創期の茶の湯の精神を取り入れることで、遊芸化、大衆化する茶の湯への警鐘を鳴らしたものである。草創期への回帰は、理念的な面での「禅」にとどまらず、「利休」という流祖への回帰を志向することでももたらされた。利休像を祭った祖堂を建立し、「利休遺偈」を千家に戻すことで、千家の茶の湯の精神的な支柱としたのである。

以上のように、近世前期における千家の茶の湯について、歴史的背景、茶の湯像、さらに茶の湯の理念といった三つの視点から論じた。その茶の湯像は、時代的、社会的変遷に対応しつつ姿を変えて継承され、その過程で多くの支持層を得た。その一方で、茶の湯の理念は、宗旦の「さび」を根底に据え、さらに全人格的なあり方まで含みこむものとして形成された理念が、その後の千家の茶を貫く不変の根本理念として今日まで継承されているのである。(3803字)